

現役保育士における「保育士イメージ」について 2

— 公立保育所保育士への調査から —

柴田 長生

1 はじめに

本研究の目的は、先の研究（柴田, 2019）で行った私立保育園保育士への「保育士イメージ調査（以下、先の調査と略す）」に引き続き、公立保育所で活躍する保育士の視点から、保育士の専門性や現場保育士の持つアイデンティティに関する考察を試みることである。宇治市立保育所勤務の現役保育士から「保育士（あるいは保育士職）に関する、自らが思い描くイメージ」を調査し、回答内容や経験年数による回答内容の変化などを分析し、併せて先の研究結果と比較し、アイデンティティをいかに確立するのかということについて考察した。

先の研究に引き続き、本研究も保育所での調査結果に基づいているので、保育所保育に携わる者を「保育士」と記述するが、幼稚園教諭を含めて保育に携わる者を「保育者」と記述するのが一般的であろう。引用文献の中で原著者が「保育者」という用語を用いている場合には、関連箇所の記述に際して「保育者」という用語を用いて区分した。

小笠原他（2017）は、保育士の専門性に関する研究が増加する一方で、それらの多くが保育研究者や保育士養成校の教員による研究であり、「保育現場からみるとどこことなく現場の実態にそぐわない」と指摘している。本研究も先の研究に引き続き、小笠原他（2017）が指摘し

た問題提起を受け、保育現場や現役保育者の側から「保育者の専門性」に関する考察を試みる。保育者の専門性に関する先行研究のレビューは先の論文（柴田, 2019）に詳述しているので、本論ではそれらを引き継ぐこととして記載を省略する。

本研究においても、保育者の成長を考察するにあたっては、秋田（2000、2001）によるVander Ven（1988）に基づく「保育者の発達段階モデル」を前提に考察する。また、保育者のアイデンティティ（Erikson E.H., 1959）の形成と保育者の専門性の成長を考察するにあたっては、西山（2006）、神長（2015）の研究などを踏まえた考察を行いたい。

2 研究目的

先の論文にも記述した、本研究を行うにあたって考慮した、保育士自身が記述した「保育士に関するイメージ」を取り扱う際の研究前提をまず示しておきたい。

- ① 現役保育士が、自らの職業（あるいは保育士である自分自身）に対して持つアイデンティティが、保育士自身が述べる「保育士に関するイメージ」にそのまま投影されるのではないか。
- ② 保育士自らが形成しているアイデンティティこそが、日々の保育実践のなかで、腑に

落ちていること、あるいは自らの保育実践目標（目的）として意識されている具体的内容であろう。

- ③ この内容が、保育現場を構成する保育士の専門的枠組み、及び保育実践基盤である。
- ④ 現役保育士における「保育士イメージ」は、経験年数と共に変化し、その変化過程の中に専門性の深化や、保育士としての成長を見て取ることができる。

先の調査における上位3位を占めた保育士イメージ内容は、1位が「(子どもの) 安心・信頼」、2位が「(子どもへの) 愛情」、3位が「(子どもを見守る)」「保護者に代わって(子どもを育てる)」であった。そして先の研究では、以上の結果から、「保育士は、子どもが安心・信頼できるように、子どもに愛情を注ぎ、保護者に代わって子どもを見守る(育てる)」という保育士自身の側からの保育士についての定義を試みた。この定義には普遍性があると思われたが、一方先の調査はある福祉法人が経営する数カ所の保育園に勤務する保育士への調査であり、調査結果やここから導き出される結果については、この法人が重視する子ども観・保育観(保育士観)の反映かもしれないとも思われた。

また、先の調査に基づく経験年数から考察した保育者の成長については、以下の結論を得た。

経験年数1～2年：目前の「子どもの受け止め」のみにもっぱら気持ちが動く。

経験年数3～5年：自分＝保育を行う者としての意識や行為が広がっていく。

経験年数6～10年：3～5年に比べて、保育士としての職業意識が深まってくる。

経験年数11年以上：6～10年に比べて、保育士イメージが客観化・相対化されてくる。

この考察に関しては、経験年数10年までの成長過程についてはよく記述できており、経験年数11年以上に「保育士イメージが客観化・

相対化されてくる」という方向性を見て取ることができたと考えているが、後に述べるように先の調査母数全体が平均経験年数8.74年(標準偏差：8.41)、であり、経験年数5年以下が全体の53.7%であるなど、比較的経験の浅い保育士を対象にした調査であり、更にキャリアを積んだ保育士がどのような成長課程をたどるのかについては明確になっていなかった。

今回の調査における研究目的は、以上のことを補うために公立保育所の現役保育士を調査対象とし、先の研究と比較することにより、保育現場や現役保育者の側から「保育者の専門性」に関する考察を更に深めることである。雇用形態の違いが、保育専門職としての位置づけや認識の違いとなって調査結果に反映されるかもしれない。

3 研究方法

2019年6月に、宇治市立保育所現役保育士39名(男2名、女37名)に対して、保育士についてのイメージ調査を行った。平均経験年数は15.56年(SD=11.73)、中央値は13年であった。調査対象の内訳については表1のとおりである。表1は、各経験年数区分の平均経験年数・標準偏差・男女内訳・各区分調査数の全体比率を示している。また参考のために、先の調査(平均経験年数：8.74年、標準偏差：8.41)における経験年数区分比率も掲載した。

表1 調査対象

経験年数	平均(年)	SD	性別			合計	前回調査
			男	女			
1年～5年	2.00	1.60	1	7	8	20.5%	53.7%
6年～10年	8.56	1.94	1	8	9	23.1%	15.9%
11年～20年	15.27	2.80	0	11	11	28.2%	30.5%
21年以上	31.45	6.41	0	11	11	28.2%	
合計	15.56	11.73	2	37	39	100.0%	100.0%

表1に見られるように、今回調査の調査数はやや少ないが、経験年数が均等に分布されており、経験年数21年以上のベテラン保育士からの回答が28.2%を占めた。調査数の関係から、経験の浅い保育士を1年～5年の区分にひとくくりしている。

アンケートの設問内容は以下の通りである(先の調査と同一内容)。

- ① 性別
- ② 経験年数
- ③ 「保育士(保育士業務・保育士職・保育士という存在など)に対する自由なイメージ」について、概ね20～30文字程度までの自由記述。思い浮かぶイメージを5つ記述する。
- ④ ③のイメージについて、自分の中でのイメージの強さを10段階評価する。
- ⑤ 記述した5つのイメージについて、1位～5位のランキングを付与する。

個人に関する情報収集は、性別・経験年数のみとし、個人が特定されないよう配慮した。

イメージ分類はKJ法(川喜田,1967)を用いて実施した。類型の際には、妥当性を高める

ために、筆者及び、筆者が所属する大学の相談職員(児童指導員経験者)の計2名が、協議して分類した。イメージ集約はThe Card 8(カード型データベースソフト)を使用し、統計処理はExcel統計12を用いて実施した。

4 結果と考察

(1) 保育士イメージの分類

先の調査と同様に、KJ法を用いて保育士イメージに関する自由記述をカテゴライズし、イメージ記述内容をまず50の内容に分類した。分類されたイメージ内容を11の副カテゴリー(以下、副分類と記述)に集約し、11の副分類から4つの主分類を導いた。KJ法によって抽出されたイメージ内容(付与コード)についてまとめたものが表2である。先の調査と比較するために、表2において今回の調査で新たに抽出されたイメージ内容を太字表記し(6項目)、逆に先の調査で抽出されたが今回は抽出されなかったイメージ内容(コード:13項目)をカッコ表記している。

表2 分類コード一覧

主分類1 子どもの受け止め			主分類2 保育			主分類3 保護者			主分類4 保育士			
副分類	コード	内容	副分類	コード	内容	副分類	コード	内容	副分類	コード	内容	
感情	111	愛情	目的	211	子ども尊重・子ども第一	関係	311	安心・信頼	役割	(411)	憧れ・モデル	
	(112)	愛着		212	安心・信頼		(312)	相談		(412)	お手本	
	113	子ども好き		213	命を守る		313	コミュニケーション・聴く		413	類に代わって	
	114	優しい・明るい		(214)	安全		321	保護者支援		(414)	その他役割	
	115	元気		215	人格・人間基盤の形成		322	保護者育成		421	専門職	
	(116)	笑顔		子ども育成	221		自立支援	323		保護者と共に	422	発達・資質の伸長
	117	厳しさ			222		子育て援助	(324)		関わる・見守る	423	保育技術
感性	121	子どもと共に	223		生活習慣・生きる力	支援			424	遊びの能力		
	122	子どもへの共感	224		社会性・友人関係・人間関係				425	資質		
	123	子どもから気づく・学ぶ	225		活動保障				426	性格・特性		
	(124)	身近に感じる	(226)		育てる・育む				427	保育士の喜び		
	125	遊び・保育を楽しむ	231		しつけ				専門職			431
	126	子どもへの所感	(232)	健康管理	432							労働特性
	127	子どもを受け止める	(233)	保育・教育	433							職員協力・人間関係
態度	131	子ども目線	234	環境作り・環境整備	434	その他保育士						
	(132)	子ども一番・ありのままに	235	遊び・生活の伝承	(435)	その他職域						
	133	寄り添う	(236)	食育	436	必要条件						
	134	見守る	保育内容									
	135	一人一人										
	(136)	支える										
	137	肯定的関わり・受け止め										
138	子どもの代弁											

注 太字は、今回の分類で新たに設定した内容コード () は、今回の回答の中になかった内容コード

表2に見られるように、今回調査におけるカテゴリ分けの結果から導かれた保育士イメージ内容を集約すると、「子どもの受け止め」「保育」「保護者」「保育士」という4つの主分類は先の調査と同じであり、副分類項目としても先の調査で導いた11項目の範囲に分類することができた。現役保育士が持つ保育士イメージの輪郭は、表2に示した主分類及び副分類の内容によって構成されることが一般論として指摘できるのではなからうか。

その上で、上に述べた保育士イメージを形成する具体的なイメージ内容については、前回と今回の調査を比較すると、かなり異なる部分も見受けられた。表2に見られるように共通する項目は少なくなく、これらは保育士が持つ「保育士イメージ」としての基礎内容と言えるだろう。その上で、前回には見られなかったイメージ内容と、今回見られなかったイメージ内容を比較してみる。

まず前回見られなかったイメージ内容には、「子どもの代弁」「子どもを育てる・育む」「(保護者に)関わる・(保護者を)見守る」「(保育士職としての)必要条件」といった内容があり、子ども専門職(=プロ)として「子ども・保護者に関わる」というイメージがより強く出ているように思われた。「笑顔」「厳しさ」という子どもへの感情も専門職としての子どもへのまなざしのようにも思われ、「態度」という副分類に加えてもよかったかも知れない。

一方今回見られなかったイメージ内容を見ると、「(子どもの)憧れ・モデル・お手本」があるが、このあたりは前回調査対象とした福祉法人(調査対象とした保育園)が共有する価値観(保育士ビジョン)のように思われた。子どもに近いところで、子どもと共に暮らす保育士が持ちたい価値観は、「子どもを身近に感じる」「子ども一番」「(子どもを)支える」という感

性や態度にも現れているのではないか。このような違いが、日々の保育展開に結構大きく反映されてくるように思われ、私立保育園の特長を形成していくのであろう。その背景に「安全」「健康管理」という保育目標も園の保育スローガンとなり得るのであろう。

保育士イメージに関する回答内容の比率について、主分類及び副分類ごとに示したのが図1である。今回の調査においては、保育士イメージに関する5つの自由記述を求めたが、同一保育士の5つの回答内容の中に同一のイメージ内容を含むことがあり、そのような場合には複数計上した。

4つの主分類の比率は、「子どもの受け止め」が32.4%、「保育」が24.5%、「保護者」が12.9%、「保育士」が30.3%となった。同一保育士による同一イメージの回答について複数計上しなかった場合の比率は、「子どもの受け止め」が34.3%、「保育」が24.5%、「保護者」が12.0%、「保育士」が29.2%となり、両者の間に大きな差はなかった。「子どもの受け止め」が第1位になるのは先の調査と同じであり、子ども専門職としての保育士にとっては、やはり子どもが一番なのであろう。

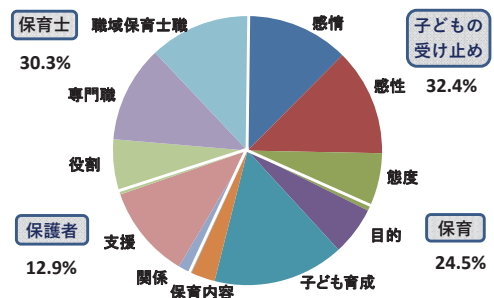


図1 保育士イメージの回答比率

注) 同一コードに複数回答があった場合に、複数件数を計上している

(2) 先の調査との比較

主分類および副分類別に、保育士イメージの回答比率について、先の調査（私立保育園）と今回調査（公立保育所）の結果を比較したのが図2である。図2に見られるように、全体的な傾向は概ね類似しているが、主分類では「保育」と「保育士」において差が見られた。また副分類に関しては、図2から分かるようにかなりの差が見られた。

まず主分類「保育士」の差異を見ると、今回調査の方が5%多くなり、主分類では第2位となっている。更に副分類を見ると「専門職」「職域保育士」の割合が多く、職業に関する意識がより高くなっている。この結果が、公立保育所の保育士である為なのか、あるいは調査対象の経験年数の高さによるものなのか定かではないが、明らかな相違が見られた（この点に関しては、後述する考察において「専門性」「職業意識」ということをキーワードに検討を試みている）。一方私立保育園の場合は、「役割」という副分類が大きくなるが、この中には「(子どもの) 憧れ・モデル」といったイメージ内容が含まれており、めざす保育者像の違いによることからの影響は見取れる。

次に主分類「保育」を見ると、私立保育園の方が全体で5%多くなっている。注目すべきは副分類であり、公立保育所の場合に「子ども育成」が多くを占める。先に述べた子どもを育む

専門職（職業）としての保育士イメージが大きく反映されていると考える。それに比して私立保育園の場合は「目的」や「保育内容」が多くなる。子ども中心に保育目的や内容を重視する園のビジョンの浸透であろうと思われる。この差は公立と私立の差ではないかと思われた。主分類「保護者」においても、公立保育所の場合に、保育専門職として「保護者を支援する」というイメージが優勢なのに対して、私立保育園の場合は、「子どもを大切にしたいために、保護者との関係に配慮する」というイメージを持ちやすいのであろうか。

最後に、主分類「子どもの受け止め」であるが、副分類を見ると私立保育園の場合には「(子どもへの) 感情」「(子どもへの) 感性」が多いのに対して、公立保育所の場合には「(子どもへの) 態度」が多くなる。公立保育所保育士が保育専門職としての意識イメージが強いのに対して、私立保育園保育士は「より子どもに近いところでのイメージ」が有意になっている。公私の違いに現れでもあろうが、より若い保育士の多い私立保育園の特長と言えるのかも知れない。

以上のイメージが背景になって、日々の保育の営みが展開されるのであろう。保育所全体の印象を構成するもの、このような結果が意外に強く反映されているようにも思われる。

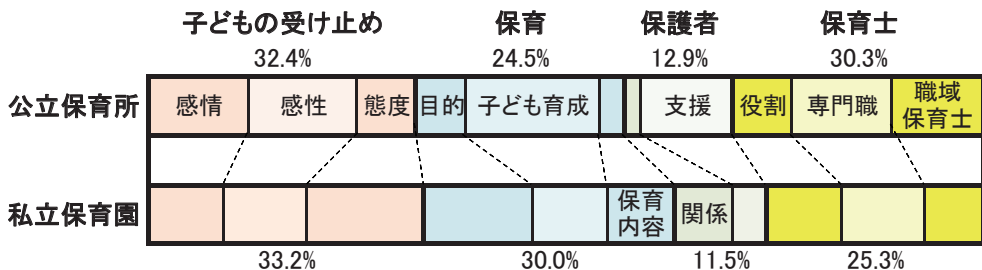


図2 先の調査との回答比率の比較

(3) 上位を占めるイメージ内容

今回の調査で抽出されたイメージ内容について、回答頻度の多かった上位 20 位までのイメージ内容をまとめたのが表 3 である。表 3 における「件数」は、各イメージ内容の抽出件数を示しており、同一保育士が複数回答した場合には重複カウントしている。「回答率 1」は、抽出された総件数に対する「件数」の占める比率をパーセント表示している。「回答率 2」はあるイメージ内容について、同一保育士が複数回

回答した場合にも 1 件としてカウントをした結果による、全体抽出件数に対する比率を示している。

平均値は、各イメージ内容を回答した際の「経験年数」「ランク」「イメージの強さ」の平均値を示している。

「順位」に示した各数値は、「回答率 1 (%)」「回答率 2 (%)」「ランクの平均」「強さの平均」のランキング順位を示している。

「注記欄」に示した*は先の調査では上位 20

表 3 公立保育所現役保育士における保育士イメージ (上位 20 位)

主分類	副分類	内容	全回答 (N=39)										注記
			件数	回答率 1	回答率 2	平均値			順位				
						経験年数	ランク	強さ	件数 1	件数 2	ランク	強さ	
子どもの受け止め	感情	愛情	6	15.4%	15.4%	16.8	1.7	8.3	12	11	6	29	
		子ども好き	7	17.9%	17.9%	22.9	2.7	9.3	11	9	17	9	
		優しい・明るい	10	25.6%	25.6%	16.6	3.3	8.1	6	4	31	33	*
	感性	子どもと共に	11	28.2%	23.1%	14.8	3.0	8.3	4	7	25	29	
		子どもへの共感	6	15.4%	10.3%	14.7	2.8	8.0	12	20	20	34	
		子どもを受け止める	6	15.4%	15.4%	7.5	1.8	8.2	12	11	7	32	*
態度	見守る	6	15.4%	15.4%	20.5	3.3	8.7	12	11	31	23		
保育	目的	安心・信頼	5	12.8%	12.8%	19.0	1.4	9.8	18	15	2	4	
	子ども育成	自立支援	10	25.6%	20.5%	19.1	3.5	9.2	6	8	34	13	*
		生活習慣・生きる力	6	15.4%	12.8%	13.7	2.5	7.3	12	15	16	43	*
		社会性・友人関係・人間関係	9	23.1%	15.4%	13.0	2.7	9.1	9	11	17	14	
		育てる・育む	10	25.6%	25.6%	16.6	2.9	8.4	6	4	22	28	**
保護者	支援	保護者支援	8	20.5%	17.9%	19.1	3.6	8.0	10	9	36	34	*
		保護者と共に	16	41.0%	30.8%	18.9	2.9	8.5	2	2	22	24	
保育士	役割	保護者に代わって	16	41.0%	38.5%	17.4	2.3	8.5	2	1	14	24	
	専門職	専門職	11	28.2%	25.6%	12.2	3.1	8.3	4	4	30	29	*
		資質	6	15.4%	10.3%	7.8	3.5	8.5	12	20	34	24	
		性格・特性	5	12.8%	12.8%	14.6	3.8	9.0	18	15	38	15	
	職域保育士職	労働特性	17	43.6%	28.2%	13.2	2.9	6.9	1	3	22	46	
		職員協力・人間関係	5	12.8%	12.8%	17.6	3.6	8.0	18	15	36	34	*
		必要条件	5	12.8%	12.8%	7.4	4.0	7.4	18	15	39	42	**

回答率 1：複数回記述した場合に、件数に複数回計上した回答率計算・・順位では「件数 1」に表示

回答率 2：同一人が複数回記述した場合は、1 件として計上した回答率計算・・順位では「件数 2」に表示

注記欄の「*」： 先の調査で上位 20 位に入らなかった副分類項目

注記欄の「**」： 先の調査で分類されなかった副分類項目

位にランキングしなかったイメージ内容を、* *は先の調査では抽出されなかったイメージ内容を示している。

比較のために、先の私立保育所調査における上位 20 位にランキングされたイメージ内容についてまとめたのが表 4 である。表 4 には、「件数」「ランク」「強さ」の順位のみを掲載している。各々の順位の意味については、表 3 と同じ内容である。

「注記欄」に示した*は今回調査では上位 20 位にランキングされなかったイメージ内容を、**については先の調査においては抽出されたが今回調査では抽出されなかったイメージ内容を示している。

表 3 の「順位・件数 1」の上位ランキング項目をみると、1 位から「労働特性」「保護者と共に」「保護者に代わって」「子どもと共に」「専門職」…という順になる。これらを用いて、公立保育所保育士が描く保育士定義を試みるなら、「保育士は、特有の労働特性の元で、保護者に代わって、保護者と共に子どもを育む、子どもと共にある専門職」とでも表現できる。先の調査からは、「保育士は、子どもが安心・信頼できるように、子どもに愛情を注ぎ、保護者に代わって子どもを見守る（育む）」という定義を導いたが、公立保育所保育士の場合は、職業意識・職業内容がより強いイメージとなっている。表 4 に見られるように、私立保育所保育士の場合は、「安心・信頼」「愛情」「見守る」というどちらかと言えば子ども寄りのイメージが上位を占めていた。公立保育士においても、子ども寄りのイメージは、上記イメージ内容以降のランクとして、「子どもと共に」「明るい・優しい」「自立支援」「育てる・育む」というイメージ内容が続く。これらをつなげて成文化すると、「保育士は、子どもと共に、明るく、優しく、自立支援を目指して、子どもを育む」と

表 4 私立保育所保育士の結果（上位 20 位）

主分類	副分類	イメージ内容	注記	全回答 (N=82)		
				順位		
				件数	ランク	強さ
子どもの受け止め	感情	愛情		2	4	3
		子ども好き		19	16	6
	感性	子どもと共に		6	31	38
		子どもへの共感		10	27	38
	態度	寄り添う	*	19	5	24
		見守る		3	23	30
一人一人支える		**	10	11	12	
保育	目的	安心・信頼		1	7	6
		命を守る	*	9	2	4
		人格・人間基盤の形成	*	16	9	6
	子ども育成	子育て援助	*	16	23	30
		社会性・友人関係		7	45	48
	保育内容	環境作り・環境整備	*	5	35	26
保護者	関係	安心・信頼	*	16	27	30
		保護者と共に		7	16	35
保育士	役割	憧れ・モデル	**	12	18	16
		お手本	**	19	23	30
		保護者に代わって		3	21	26
	専門職	資質		13	31	16
		性格・特性		13	30	49
保育士職	労働特性		13	35	16	

注記欄の「*」: 今回調査では上位 20 位に入らなかった副分類

注記欄の「**」: 今回調査では抽出されなかった副分類

いう記述になる。ここでも、子どもを育む側(職)としての保育士イメージとなる。

しかし、私立保育所保育士の場合の「安心・信頼」「愛情」「見守る」というイメージは、今回調査でも「安心・信頼」はランク・強さにおいて上位、「愛情」はランクにおいて上位、「見守る」についても件数で 12 位となっており、保育士が持つ保育士イメージ内容としては主要なものであることに変わりないと考える。

今回調査で興味深いのは、「回答率1」と「回答率2」の数値の差である。今回調査では保育士イメージの自由記述を5つ求めており、また回答に複合するイメージ内容を「回答率1」の場合は重複計上した結果であるので、両者に差のあるイメージ内容は保育士として別の保育士イメージに重ねても繰り返し述べたいイメージ内容といえることができる。故に、両者に差のあるイメージ内容は、現役保育士にとって思いのこもった強い印象の伴うイメージ内容と言えるのではなからうか。「子どもと共に」「子どもへの共感」「自立支援」「社会性・友人関係・人間関係」「保護者と共に」「資質」「労働特性」などがこれに該当する。ちなみに、今回の各回答において、1つのイメージを抽出した回答は全体の73.1%、2つのイメージ内容を抽出した回答は24.2%、3つのイメージ内容を抽出した回答は2.7%であった。

表3・表4の「注記」に示した、2回の調査の比較結果は、そのまま公立保育所保育士と、私立保育所保育士の持つイメージの差をよく表していると言えよう。特に表4に見られる「(保護者の)安心・信頼」「憧れ・モデル」「お手本」などは、この私立保育園特有の価値観であり、「命を守る」「環境作り・環境整備」などはこの園特有の保育観であろうと思われた。

表5 経験年数別にみたイメージ内容の分布
(公立保育所)

主分類	経験年数			
	1～5年	6～10年	11～20年	21年以上
子どもの受け止め	32.6%	24.1%	41.2%	30.1%
保育	32.6%	24.1%	11.8%	31.5%
保護者	6.5%	9.3%	13.2%	19.2%
保育士	28.3%	42.6%	33.8%	19.2%

(4) 経験年数によるイメージ内容の推移

経験内容別に見たイメージ内容(主分類)の分布について、公立保育所保育士の結果をまとめたのが表5、私立保育園保育士の結果をまとめたのが表6である。表5から以下のことが読み取れる。

- ①「子どもの受け止め」については、各経験年数区分で変動はあるものの、一貫してそれなりに高い比率を取る。保育士は基本的に子どもの専門職である。経験年数11～20年で41.2%と最高比率となる。この主領域を構成するイメージ内容の変遷に着目する必要があり、そのことと保育士としての成長過程が関連すると思われる。
- ②「保護者」については、経験の浅い区分では非常に低率であるが、経験が増すと共に比率が増大する。保育という営みにおける「保護者支援」への関与の増大が、保育士としてのキャリアの証である。
- ③「保育士」については、経験年数6～10年で大きく膨らみ、しばらくその傾向を維持しながら、経験年数21年以上になると減少する。この比率が増大する時期に、専門職(または職業)としての保育士ということへの意識が高まる。中堅保育士時代とでも表現できよう。
- ④「保育」については、最初の5年では高比率だが、その後は他の主分類領域に押さ

表6 経験年数別にみたイメージ内容の分布
(私立保育園)

主分類	経験年数			
	1～2年	3～5年	6～10年	11年以上
子どもの受け止め	41.3%	32.4%	30.8%	28.9%
保育	30.3%	29.1%	20.5%	36.3%
保護者	9.2%	11.5%	15.4%	11.1%
保育士	19.3%	27.0%	33.3%	23.7%

れて減少する。しかし、経験年数21年以上になると高比率に復帰してくる。保育士としての業務内容を構成するのがこの領域であり、着任して経験の浅いものは日々の自らの職業活動そのものへのイメージ化と思われる。ベテラン期に復帰するのは、確実に実質を伴った自らの職業内容を構成できる故の高率復帰なのであろうか。

- ⑤ 経験年数21年以上の区分では、4つの主分類に均質なイメージ化を果たしている。ベテランとしての到達点なのであろう。

表6においても、上に述べたような特徴が概ね見られたと考える。①～⑤は、専門職として

の保育士の成長過程のアウトラインを示していると思われる。

経験年数区分毎に、イメージ内容の回答結果を図示したのが図3である。図3は下位のイメージ内容毎に表示し、それぞれの年齢区分で見られた主要なイメージ内容を図中に表示している。主分類の境界を太線で、副分類の境界を破線で表示している。

図3で示した各年齢区分のイメージ内容の特徴を考察するために、回答されたイメージ内容の全テキストを、経験年数区分別に集約してKHCoder (Ver3) (樋口、2014) を用いて分析を試み、各経験年数区分における回答イメージ

主分類	5年以下 N=8	6年～10年 N=9	11年～20年 N=11	21年以上 N=11	主分類
子どもの受け止め	優しい・明るい	愛情	愛情	愛情	子どもの受け止め
	遊び・保育を楽しむ	子どもと共に	子ども好き	子ども好き	
	子どもを受け止める	子どもを受け止める	優しい・明るい	優しい・明るい	
	肯定的関わり・受け止め		元気	笑顔	
			子どもと共に	子どもと共に	
保育	自立支援	自立支援	子どもへの共感	子ども尊重・子ども第一	保育
	生活習慣・生きる力	社会性・友人関係・人間関係	寄り添う	安心・信頼	
	社会性・友人関係・人間関係	育てる・育む	命を守る	自立支援	
	育てる・育む	保護者と共に	育てる・育む	子育て援助	
	遊び・生活の伝承	保護者に代わって	コミュニケーション・聴く	生活習慣・生きる力	
保護者			保護者支援	社会性・友人関係・人間関係	保護者
			保護者と共に	育てる・育む	
保育士	専門職	性格・特性	保護者に代わって	保護者支援	保育士
	資質	労働特性	保護者と共に	保護者と共に	
	労働特性			保護者に代わって	
	必要条件		職員協力・人間関係	労働特性	
		職員協力・人間関係	職員協力・人間関係		

図3 経験年数別に見た保育士イメージ内容の回答分布

の内容とイメージ語の使用頻度に関する分析を試みた。得られた共起ネットワーク分析結果と、それぞれの特徴を図示したのが図4～図7である。

図4は、経験年数5年以下のものである。初任保育士であるこの経験年数区分では、保育士イメージは保育の対象である「子ども」を中心に、ここから「保護者」や「保育実践」「保育への所感」「保育士職への所感」「保育実践（専門内容）」「保育士への所感」というキーワードでくくることのできる各イメージ群がたこ足のように広がった構造を読み取ることができる、子ども中心のイメージの拡がりである。初任保育士としての日々の営みが、この様なイメージの中で積み重ねているのだろうと思われる。実感出来るイメージは、保育士である自分と子どもとの関わりを通して形成される。

図5は、経験年数6年～10年のもので、中堅保育士にさしかかる時期の保育士イメージである。初任保育士のものである図4との差異は、保育の対象として「子ども」と「保護者」が対になってイメージされているところであり、子育て支援としての職というイメージが開始され始めている。そこから保育を構成する様々なイメージ群がたこ足のように広がっている感もあるが、その中で「保育の社会的役割」という新たに見られはじめたイメージ群を介して「保育職の現実」「保育士としての態度」というイメージ群が連なり、「職業意識」を構成するイメージが形成されているところが前の時期との大きな相違である。図3に見られるように、「保育士」という主分類の比率が高くなり、下位イメージ内容として「保護者に代わって」「労働特性」のウエイトが大きくなっている事と関連しているよう。

もう一つは前の時期の延長として「保育実践」「保育への所感」「保育を構成する専門内容」と

いったキーワードでくくることのできるイメージ群が広がっている。これらをひとくくりにするなら、「実践」という上位概念でくくることのできる領域である。職としての保育士イメージが、「職業意識」と「実践」という2つの領域に分節し始めている。

図6は、経験年数11年から20年のもので、ベテラン保育士の域にさしかかる時期の保育士イメージである。保育の対象は前の時期と同様に、「子ども」と「保護者」が保育対象として対になっているが、「保育を構成する専門内容」に関するイメージが有機的に統合されてイメージ群として形成されている。「専門性」に関するイメージが明確になってくる時期ということができよう。図3では、「主分類：保育士」において、「労働特性」と共に「専門職」という下位イメージが、他のどの経験年数区分よりも高比率になるところと関連していると思われる。また、この時期に「主分類：子どもの受け止め」の比率が高くなるのは、「保育士の専門性は、子どもに関する専門性である」という所から派生したものと思われる、初任保育士の「子ども中心のイメージの拡がり」とは質を異にするのだと思われる。

もう一つの特徴は、「実践」に関する各イメージの拡がり方の前の時期との相違である。前の時期では、保育対象からややたこ足的に広がったイメージであったが、この時期では保育対象である「子ども」「保護者」イメージから、「保育実践」→「保育士としての所感」→「保育職の現実」→「保育への所感」と繋がっており、保育士としての実践に関する確実なイメージ構造が確立されているのであろう。専門性への志向性の強さと共に、ベテラン保育士としての保育士イメージはこのような構造をもって形成されるのであろう。

図7は、経験年数21年以上のもので、大ベ

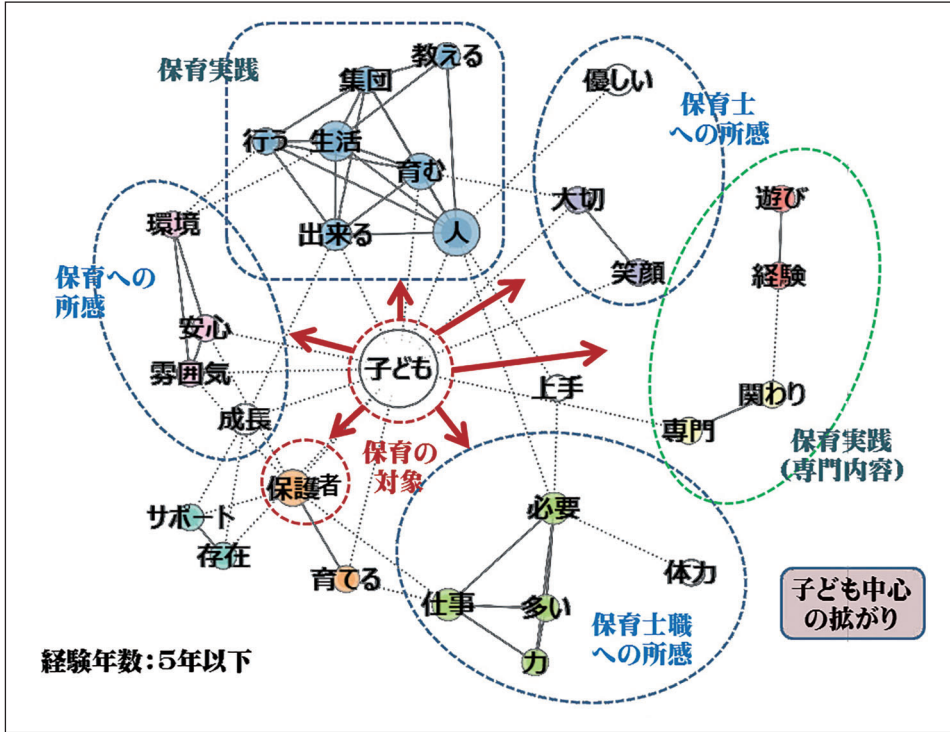


図4 共起ネットワーク (経験年数5年以下)

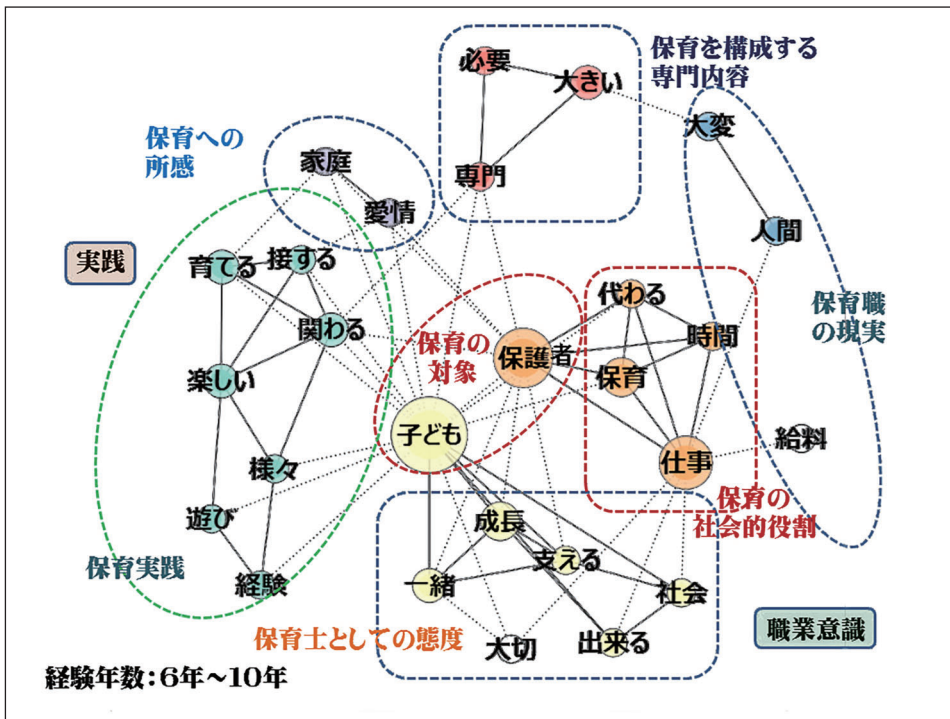


図5 共起ネットワーク (経験年数6年~10年)

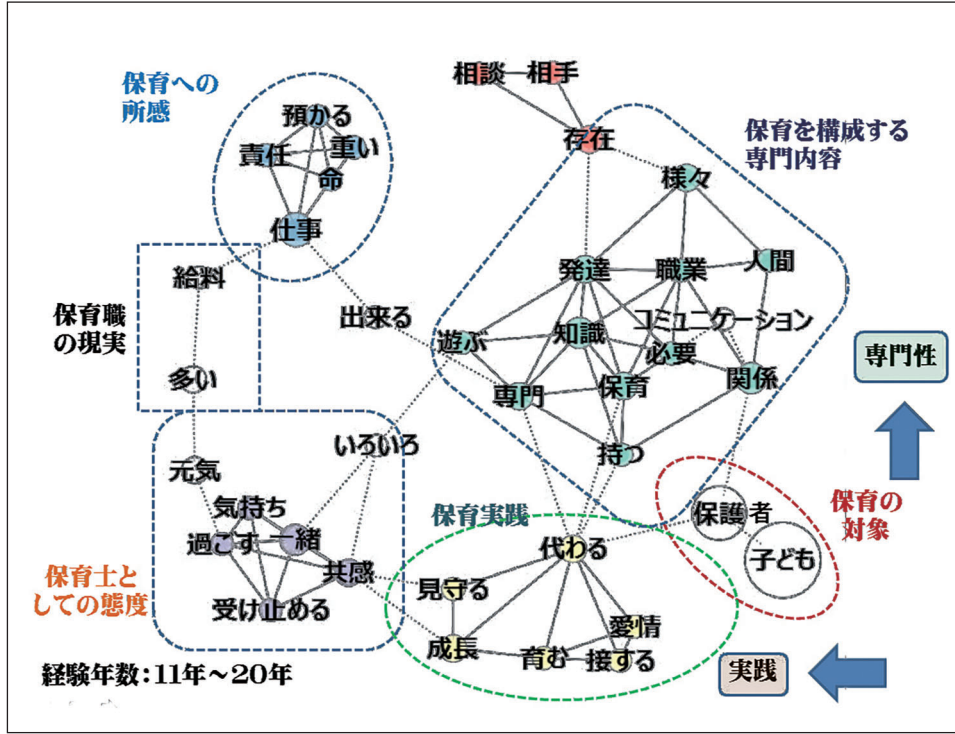


図6 共起ネットワーク (経験年数 11年~20年)

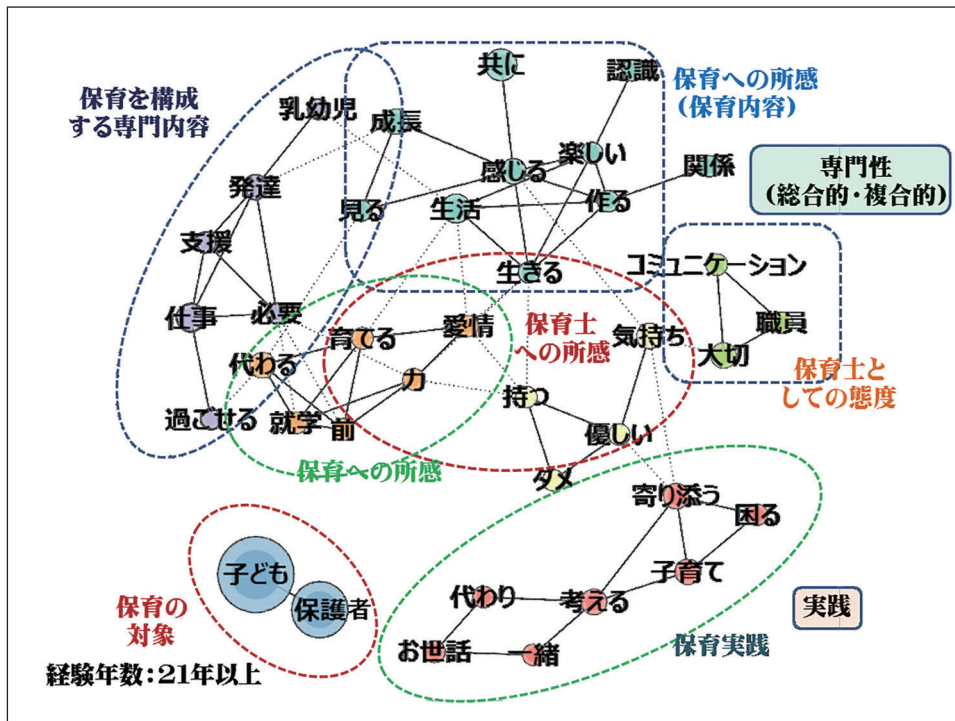


図7 共起ネットワーク (経験年数 21年以上)

テラン保育士の保育士イメージ構造である。図7に見られるように、前の段階とかなり異なったイメージ構造である。保育対象としての「子ども」「保護者」の対は変わらないのだが、それと関連するのは、内容的にもシンプルな「保育実践」イメージが展開されるだけである。図7に示されている「保育実践イメージ」を成文化してみると、「保護者に代わって（保護者と一緒に）、子どもに寄り添いながら子育てする（お世話する）」ということになる。日々の保育の営みは、このようなシンプルなイメージになってくるのだが、保育に必要な基本がここに示されているのであろう。

しかしこのようなシンプルな日々の保育の営みは、図の上半分に示されている、「総合的・複合的な専門性」とまとめることのできるイメージ群に含まれて営まれているところが大きな特徴である。この一連のイメージ群は、「保育への所感」「保育士への所感」「保育士としての態度」「保育への所感（保育内容）」「保育を構成する専門内容」というキーワードでくくることのできる各イメージ群が、輻輳し重層化されたかたちでトータルなイメージとして形成されたものであり、専門職としての保育士イメージの最終到達点として了解することができるのではなからうか。前の時期ほど、ことさらに専門職を標榜しないところに、更に深い専門性を感じる。表5に示されている4つの主分類のバランスの良さや、図3に示された下位の保育士イメージのバラエティーの豊かさなどが、図7のイメージ構造を形作る条件となっているのであろう。

5 総合考察

(1) 保育士イメージを構成するイメージ内容

現役保育士に対して、2度の「保育士イメー

ジ」に関する調査を行ったが、イメージ記述に用いられた個々のイメージ内容の分類結果は表2のとおりであり、2度の調査において大きな違いはなかった。このことから、現役保育士（保育者）における「保育士（保育者）イメージ」を構成する要素は、表2に示した4つの主分類と11の副分類に一般的に集約できると考える。また、個々の保育士（保育者）が記述するイメージを構成する下位のイメージ内容は、表2に示したそれぞれの下位イメージ内容にほぼ分類できるのではないかと。経験年数の差や、所属保育所（園）の保育理念の違いなどによる保育士自身の保育士イメージの輪郭は、表2に示した主分類・副分類内容の構成比率や、それらを形成する下位イメージ内容の分布の違いによって、その特性・特徴を表現できるのではないかと思われる。

(2) 経験年数による保育士イメージの成長

今回の調査に見られた経験年数による保育士イメージの成長の様子を示したのが図4～図7である。図に見られた保育士イメージの特徴をまとめると次のようになる。

- ① 経験年数5年まで：子ども中心に拡がる保育・保育士イメージ
- ② 経験年数6年～10年：保育の対象を「子ども及び保護者」と捉え、「（高まる）職業意識」と「（専門性を意識し始めた）保育実践」が、イメージの中に分節し始める。
- ③ 経験年数11年～20年：保育対象である「子ども及び保護者」を出発点として、「保育の専門性の深化」「体系化された保育実践展開」という2方向の異なるイメージ内容が、保育士における二大テーマとして明確になってくる。
- ④ 経験年数21年以上：「子ども及び保護者」への保育実践イメージは、前のステー

ジに比べて簡潔な内容になるが、それらを「総合的・複合的な専門性」が豊かに包み込むような自在なイメージ。

上記の成長段階を秋田（2000, 2001）によるVander Ven（1988）に基づく「保育者の発達段階モデル」と比較すると、①は秋田による「実習生・新任の段階」及び「初任の段階」と、②は「洗練された段階」と、③は「複雑な経験に対処できる段階」と、④は「影響力のある段階」とほぼ対応するように思われる。

今回の調査は公立保育所保育士への調査であることから、前回実施した私立保育園保育士の調査に比べて「(福祉労働者としての)職業意識」がより強く見いだされた。しかしそのことも含めて、我が国における一般的な保育士の成長過程が①～④の段階によく現れているのではないかと考える。

図4から図7に示した結果で特記できるのは、保育士の専門性の形成・構築過程であろう。専門性への意識は、保育の対象を「子ども及び保護者」と定め、それらに対して日々の保育の営みの中でどのようなことを展開するのかが明確になり始める、②に示した経験年数6年以上の段階から意識され始める（図5：この時期は専門家としての意識としてよりも、職業意識の方が強い時期である）。そして③で示した経験年数11年以上の段階では、「体系化された、明確な保育実践展開」を行う一方で、「保育を構成する専門内容」への統合化されたイメージの中で、「保育の専門性」が一挙に深化してくる（図6）。しかし④で示した経験年数21年以上の時期になると、図7に見られるように、凝縮された専門志向や、系統化された実践展開は、むしろシンプルで一見曖昧なものになってくる。しかし図7に見られる「総合的・複合的な専門性」が保育士イメージ全体を包み込んでいることは、④の段階の専門性が、③の段階での「深化

を経た上でのより自在なものに成長したのだと考える。保育士の専門性の形成・構築過程は、以上のような経過をたどるのであろう。

(3) 保育所全体が持つ保育理念と保育士イメージ

先の調査との比較に関する結果と考察で、私立保育園の場合には、その法人が有する保育ビジョンや保育理念が、個々の保育士イメージの中に反映されていたのではないかとすることをすでに述べた。今回の調査において、保育士の成長のゴールを図7で示した内容であるとしたが、比較のために前回調査した私立保育所保育士への調査から、経験年数11年以上の保育士の回答内容について、KHCoder（Ver3）（樋口、2014）を用いて共起ネットワーク分析を行った。その結果が図8である。

図7と比較すると、「保育実践」に対して「保育士への所感」イメージが絡み、それらを「保育への所感」「保育を構成する専門内容」「保育士としての態度」に関するイメージが包み込んで、「総合的・複合的な専門性（というより保育の営み）」を構成しているという点において、図7と似たような構成になっている。図8もまた、保育士イメージの到達点なのであろう。

図7と異なるのは、抽出された「イメージ語」の差異である。例えば保育実践において保育対象である「子ども及び保護者」という言語対は抽出されず、「保育専門職としての相対的イメージ」に代わって、「子育て」「一緒に」「楽しむ」「受け止める」「共感」といった保育における「価値観」のようなものが列挙される。その最たるものは「人」「命」「守る」という言語対であり、これはこの私立保育園の実践理念項目でもあった。図8に見られる「人・大切」「喜び・感じる」「家庭・援助」「生活・共に」「発達・喜ぶ」といった保育実践を囲む保育士としての態度も、この法人の保育理念に通じるのであろう。

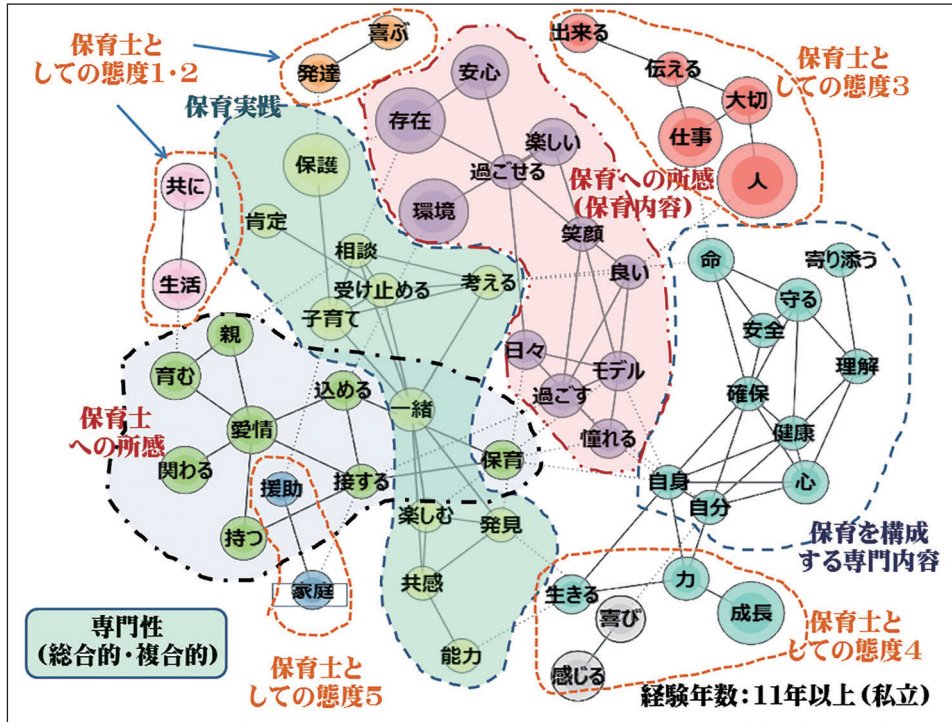


図8 共起ネットワーク (経験年数 11 年以上・私立保育園)

保育を営む保育士集団（法人）がめざす「保育理念」が、具体的な保育実践と絡んだ形で「保育士イメージ」として意識され、そのことが自らの保育士としてのアイデンティティとして形成されることは、(2) で述べた経験年数による保育士イメージの成長と併せて重要なポイントになる。専門職の成長を担保する「価値的な面（内容）」の保育実践者への受肉化についても見逃してはならない点であろう。公立保育所の場合には、職業人としての専門分化は見られても、この様な点については弱い面を持っているかもしれない。

(4) 保育士としてのアイデンティティの形成について

神長（2015）が指摘する、保育者の専門性についての理解や議論の方向性については、保育士自身がイメージしている本研究における考察

内容に沿って展開していけば、その方向はかなり具体的に見いだせるものと考えられる。

本研究では示さなかったが、先の研究において、回答した保育士達は、その回答内容のイメージの強さに関して「かなり強く感じている」と回答していることを示した（柴田, 2019）。今回の調査においても、10段階評価で調査した「イメージの強さ」の平均値は 8.39 (SD:1.72) であり、かなり高い値であった。それ故、本研究で回答を得た現役保育士の保育士イメージ内容は、異なる経験年数の保育士それぞれにおいてリアリティーの高い内容であろう。

本研究では、「現役保育士が、自らの職業（あるいは保育士である自分自身）に対して持つアイデンティティが、保育士自身が述べる『保育士に関するイメージ』にそのまま投影されるのではないか。」という事を前提としたが、回答を得たイメージ内容に準拠して、各保育士が保

育職にある自分自身に関して、本当に確からしく「そのようである」と腑に落ちて思っているであろうか。イメージ記述は、あくまでも主観記述である。

秋田（2000）は、保育者は経験を経る中で危機に直面しそれを乗り越えることで保育者としての成長があり、その変遷の中に保育者イメージが形成されると述べている。本研究で考察した経験を経る中でのイメージ変化は、秋田が指摘する変化像と近似する。

西坂・森下（2009）は、秋田（2000）の指摘を踏まえながら、保育実践経験5～10年の幼稚園教諭について、保育者アイデンティティの形成過程を、インタビューを通じて考察している。また、吉田他（2015）は、保育者の「気付き体験」に着目し、経験年数が深まるにつれて、「気付き体験」は、子どもの表面的行動からだけでなく、行動が持つ意味や、保護者と保育者との繋がりや保育に与える保育環境との関連において語られるようになると指摘している。インタビューや語りもまた主観表出であり、それらを経験年数の変遷によって質的に捉えるところや、その考察結果は本研究の結果と近似する。

保育現場において、それぞれの保育士が依って立つ「保育士に関するセルフイメージ」がより明確で意味を持つためには、西山（2006）が指摘するような「子どもを育むことへの保育者効力感」の形成・獲得状況と、それらを担保する素地となっていると感じている「保育士イメージ」との関連をさらに調査する必要がある。今回調査したような、経験によって積み上げられた「保育士イメージの変遷像」が、自らのなにかがしかの「保育者効力感」と連動して実感でき、このことについて（自らの変化や、そのことに伴う効力感の変化について）客観的に認識ができているのであれば、そこで認識された「保育士イメージ」を「保育士としての現下

のアイデンティティ」と呼ぶことができるのであろう。なお、効力感とは、ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知であり（Bandura, 1977）、保育士が自らの保育に対して腑に落ちていることが、保育者効力感に反映されると推察される。

しかし、「保育者効力感」もまた主観であり、実践に裏打ちされ実践に結びつくような確からしい効力感もあるが、単に「自分は出来る」とする過剰評価として表出されることも考えられる。上山・杉山（2015）は、「保育者の経験年数は、部分的に保育に関する省察に媒介されて、実践力の認知に影響を与える」と指摘しており、「保育者効力感」が確かな「実践力の認知」によって担保される時に、上に述べた「確からしい効力感」となり得るのであろう。その際に、上山・杉山が指摘する「保育者の経験年数が、保育者自身の省察に媒介されて影響を与える」という指摘は興味深い。経験年数の差異による保育者自身の「省察」は、本研究における経験年数による保育士自身による「保育士イメージ」と近似すると思われる。保育士イメージの内容と、保育士自身の持つ「自己効力感」や「実践力の認知」は、相対的に取り扱われ意識化された時に、真の「保育士アイデンティティ」や「保育者の専門性理解」に達することができるのだと考える。このような了解はきわめて現場的・実践的である。

また、これらのことが達成できるためには、(2)で示した経時変化や、秋田（2000, 2001）による「保育者の発達段階モデル」に加えて、それらの経時変化（成長）が実現されるためのバックボーンとしての(3)で述べた「保育者集団（組織・法人）」における保育理念の意識化・明確化や、その経時的深化がことのほか重要であるように思われる。保育実践における、専門性獲得のための職場内研修も、このような方向

で実施されなければならないのであろう。

6 おわりに

先の研究に引き続き、公立保育所での調査を実施し、現役保育士（保育者）の有する保育士イメージの一般的なアウトラインと、その成長過程の方向を見いだし、そこから保育者の専門性に関する構成枠組みについて考察した。本研究が、現場への橋渡しに少しでも貢献することができれば、望外の喜びである。

本調査は調査数が十分な数を得られていない。男性保育士に特有な保育士イメージが存在すると思われたが本研究で取り扱えなかった。保育士の自己効力感と関連づけた研究を含め、更なる調査・研究が今後の課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、宇治市立保育所の先生方にアンケート調査のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。また、KJ法実施に当たってお手伝いいただいた京都文教大学職員の川本千夏氏と、執筆段階で貴重なご助言をいただいた京都文教大学非常勤講師の大森弘子氏に深謝いたします。

本研究の一部を、日本保育学会第73回大会で発表した。

引用文献

- ・秋田喜代美. (2000). 保育者のライフステージと危機. 発達 83号 (pp.48-52). ミネルヴァ書房.
- ・秋田喜代美. (2001). 保育者のアイデンティティ. 森上史朗・岸井慶子編. 保育者論の探求(pp.109-130). ミネルヴァ書房.
- ・Bandura, A. (1977): Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), pp.191-215, American Psychological Association.
- ・Erikson,EH, (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press.
- ・小此木啓吾訳編. (1973). 『自我同一性』. 誠信書房.
- ・樋口耕一. (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して (p. 15). ナカニシヤ出版.
- ・神長美津子. (2015). 1 展望 専門職としての保育者. *保育学研究*第 53 巻第 1 号 (pp.94-103).
- ・川喜田二郎. (1967). 発想法—創造性開発のために. 中公新書. (p.136). 中央公論新社.
- ・西山修. (2006). 子どもの社会性を育むことへの保育者効力感とアイデンティティ地位との関係. *子ども社会研究* 12 号. (pp.57-69).
- ・西坂小百合・森下葉子. (2009). 保育者アイデンティティの形成過程—保育実践経験 5～10 年の幼稚園教諭に対するインタビュー調査から—. *立教女学院短期大学紀要* 41 (0). (pp.51-60).
- ・小笠原文孝他. (2017). 保育現場の視点から捉えた「保育士の専門性」議論の再考. *保育科学研究*第 8 巻. (pp.84-92).
- ・柴田長生. (2019). 現役保育士における保育士イメージ」について. *心理社会的支援研究*第 10 巻. (pp.3-18). 京都文教大学.
- ・上山瑠津子・杉山伸一郎. (2015). 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連. *教育心理学研究* 63 (4). (pp.401-411).
- ・Vander Ven. K. (1988). Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peterd (Eds.). *Professionalism and the early childhood practitioner*. Teachers College Press.
- ・吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修. (2015). 岡山大学教師教育開発センター紀要第 5 号. (pp.9-18).

Abstract

The Various Child-Care Provider Images of Current Child-Care Providers (2) – Based on a Survey of Public Day Care Center Child-Care Providers –

Chosei SHIBATA

This paper is based on a survey of 39 active child-care providers to determine the scope of their self-images. Their multiple child-care images were analyzed and classified using “KJ’s method”.

After analysis and classification of the child-care images of the child-care providers, four predominant images became clear.

Category 1: the custody of a child (32.4%), including sub-categories of love, feelings about a child, and compatibility.

Category 2: The child-care (24.5%), including the sub-categories of purpose of child-care, up-bringing of a child, and nursing.

Category 3: the protector (12.9%), including the sub-categories of relationship, and protector support.

Category 4: the child-care provider (30.3%), including characteristics of the role, child-care profession, child-provider jobs and workplace.

The child-care image components varied depending on the number of years of child-care provider work experience. The analysis and classification of their child-care images indicated a development process in their child-care images.

The main points of the child-care images can be summarized as follows -

- (1) In the case of less than five years of child-care work experience: the images of child-care providers are centered on the child.
- (2) In the case of six to ten years of child-care work experience: the images of child-care providers are focused in two directions, where one direction is an improvement of vocational consciousness, and the other direction is a budding consciousness of a specialty.
- (3) In the case of 11 to 20 years of child-care work experience: the images of child-care providers are focused in two directions, where one direction is the development of a systematized child-care practice, and the other direction is a deepening of specialty.
- (4) In the case of more than 21 years of child-care work experience: the images of child-care providers are transformed from a broad compound specialty scope of practice into a concise child-care practice.

Key words : child-care provider image, child-care provider specialties, growth of the child-care provider